

第2回 河合隼雄先生追悼記念シンポジウム 報告

河合隼雄未来を語る

— 院生たちとの対話 —

シンポジスト：松田真理子（本学臨床心理学部教員）

坂井新（田中クリニック主任心理士）

片山由季（児童養護施設春光学園心理士）

司会：高石浩一（本学臨床心理学部教員）

日時：2009年7月22日（水）13:00-14:30

会場：京都文教大学 弘誓館 G102 教室

200名を越える出席者のもと、故河合隼雄先生と一期生の院生たちとの対話を収録したビデオを見直し、河合隼雄先生が我々に託そうとした未来とはどのようなものだったか、それを受けて我々はどうのように成長したかを、当時の参加者と共に語り合った。

当日は、まず岡田康伸先生のご挨拶の後、河合隼雄先生と院生たちとの対談ビデオを視聴した。その概要は当日配布した資料（別添）に詳しいが、その他に河合隼雄先生がどのようなお覚悟で臨床心理士の国家資格のために奔走しておられたのか、ということが明らかになるようなやり取りも、今回は公開された。「これはなあ、書けへんねんけれども、知っというて欲しいんや…」とユーモアを交えて語られた、厚生省（当時）との生々しいやり取りは、今につながる資格問題の難しさを如実に伝えると共に、舞台裏での先生方の苦悩や努力を我々に強く印象づけるものだった。

引き続いて行われたシンポジウムでは、当時のビデオを振り返っての印象やその後の活動ぶりについて、各シンポジストにご報告頂いた。まず田中クリニックの主任心理士、坂井新氏は「眼の前にいるクライアントさんを大切にする」

という河合先生のお言葉が、その後の心理臨床活動の根幹になったことを述べられた。次に主に児童相談所や児童養護施設で臨床経験を積まれた片山由季氏は、やはり「眼の前にいるクライアントさんを大切にする」ということ、また周囲の人たちといかに協力体制を築けるかが大切であるということなどを述べて頂いた。本学専任講師の松田真理子氏は、ご自身のイギリスにおける調査結果を通して、英国における臨床心理士の社会的役割の大きさや認知度の高さを強く印象づけられたことを報告された。そして国家資格化について、さらに推進していく必要性を強調された。

残りの時間は会場の参加者との交流にあてられた。その中で、「同僚の認知がなかなか進まない職場でどのように活動していくか」という質問に対し、シンポジストから組織の中で仕事をする際の、同僚とのより良い関係の構築の重要性が強調された。それはコメディカルや同僚たちとの日常的な交流、バランス感覚、相互理解が基盤となっていることが確認された。

最後に岡田先生から「国家資格に関しては、志を高く持ちたいと改めて感じた」と締めくくられた。当日は、初めて河合先生の映像を見たという学生さんも数多く、その気さくな飾りのない言葉に強く印象づけられた参加者も少なかつたようである。以下に、シンポジウム終了後に回収された感想から幾つかを引用して、成果に代えたい。

- ・初めて河合先生の声で、河合先生の言葉が聞けて嬉しかったです。河合先生の「人の

話をいかに普段聞いていないか。話を聞くってということは本当に価値のあることなんだ」というお言葉が、ほんとに胸にささりました。この言葉を大切に学んでいきたいです。(臨床3回女子)

- ・亡き河合先生の語られている姿に出会うことができ、とっても嬉しく思っています。生前は写真以外でお見かけすることがなく、今回初めて先生のお声を聞く機会となりました。とても気さくな方に感じられる一方で、先生が行ってこられたことの偉大さを、その在りようの背後に感じました。厳しさを不必要に外に出さないその在り方に、多くの人が癒され、力を貰っておられたのだらうと思いました。心理臨床の入り口に立ったばかりの自分ですが、今回、触れさせていただいたものをじかと自分の中に受けとめ、他者のために自分を知らず歩み続けてみたいと思います。貴重な体験を頂き、どうもありがとうございました。

(臨床 M1 女子)

- ・河合先生の臨床心理に対する想いや育んでこられたこと、心をこめてされてきた行動を感じる事ができました。久しぶりに、河合先生にお逢いできたという気持ちでいっぱいです。良い機会をありがとうございました。その時の方々が、各方面でご活躍されている様子も聞かせていただき、河合先生も目を細めて喜んでおられるのだろうなあと思いました。(一般)
- ・河合先生のお声を伺えて、それが一番でした。心理士の立場を向上させるため、先生ご自身ご苦勞をいとわず、厚生省の役人と対決されたことが印象に残りました。(臨床3回男子)
- ・今日 DVD ごしでしたが、河合先生に会えて、より腹を決めて大学院を目指そうと思いました。ありがとうございました。(臨床3回女子)